

論文審査の結果の要旨

氏名：畦 地 良 平

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：高齢者ケアにおけるワーク・エンゲイジメント

審査委員：（主 査） 教授 内 藤 佳津雄[Ⓔ]

（副 査） 教授 岡 隆[Ⓔ] 教授 依 田 麻 子[Ⓔ]

本論文は、高齢者ケア領域における介護職員を対象として、高い職務動機づけを示すワーク・エンゲイジメントについて、職務動機づけの低下と関係するバーンアウトを構成する因子との関係を検討し、その概念的な位置づけを明確にするとともに、影響を受ける個人的・環境的な要因について多面的に検討した心理学的研究である。

研究1・2では、全国の高齢者介護事業所に対して実施した介護職員への調査の結果（1129名）について、高齢者ケア領域の介護職員のワーク・エンゲイジメントとバーンアウトの統合的モデルの作成を行っている。その結果、バーンアウトの情緒的消耗感が脱人格化に影響を及ぼすプロセスとワーク・エンゲイジメントを媒介してバーンアウトの個人的達成感に影響を及ぼすプロセスが相互に関連するモデルの妥当性が高いことをみいだした。職業全般に適用可能とされている「仕事の要求度－資源モデル（Job Demands-Resources Model; JD-R モデル）」を援用してモデルを形成しているが、JD-R モデルでは2つのプロセスが独立的であるのに対して、それとは異なり、2つのプロセスが関連しているモデルの適用が妥当であることが、この研究から示唆された。また、このモデルは、多母集団同時分析によって、訪問介護、通所介護、短期入所生活介護、小規模多機能型居宅介護という異なる種類の事業所に共通して適用できる汎用性が高いものであることが確認された。

研究3・4・5では、統合的な居宅での介護サービスである小規模多機能型居宅介護事業所の介護リーダー（1906名）への調査結果から、ワーク・エンゲイジメントとバーンアウトに影響する要因について検討された。影響要因としては、職業的なストレスを高める仕事の量やネガティブな心理的風土等の「仕事の要求度」、ストレスの緩和効果があると考えられる仕事の質的負荷やポジティブな心理的風土等の「仕事の資源」、個人的な行動の傾向に關係する気質等の「個人の資源」を総合的に取り上げ多変量解析によって影響要因を明らかにしている。その結果、ワーク・エンゲイジメントには、個人の気質のうち行動賦活系、心理的風土のポジティブな要素、職場ストレスの質的負荷が有意に關係していること、情緒的消耗感には、個人の気質のうち行動抑制系、心理的風土のネガティブな要素、職場ストレスの質的負荷と量的負荷の両方が有意に關係していることが明らかになった。また、個人の気質よりも、心理的風土や職場ストレス等の職場環境や組織に關連する要因の影響の方が相対的に大きいことが明らかになった。

研究6・7・8では、全国の特別養護老人ホームの介護職員（653名）への調査結果から、ワーク・エンゲイジメントとバーンアウトの關連要因について、職場環境と職員個人の要因の両方の影響が検討して、さらに影響要因を細部にわたって明らかにした。とくに、この研究での大きな成果は、ストレスに直面したときの解決方法の傾向を示す新たな変数として、問題解決の際に論理的に熟考して判断する傾向を示す合理性処理と感覚や直感によって判断を行う傾向を示す直感性処理という情報処理スタイルを取り上げた点にある。結果としては、合理性・直感性処理の傾向のいずれもがワーク・エンゲイジメントを高めるが、情緒的消耗感とは關連していないこと、また直感性処理の高さは脱人格化の高さと關連していることが明らかとなった。つまり、直感性処理の傾向は職務動機づけを高める効果がある一方で、援助対象者への脱人格的処遇につながる可能性があることが示唆され、職場教育等において留意すべき点であることが提案された。

以上のように、本論文では、調査計画を緻密に立てて、高齢者ケア領域の介護職員に適用可能なワーク・エンゲイジメントとバーンアウトの概念的整理をするとともに、どのような変数が影響を及ぼすのか、多変量解析を用いて明らかにし、この分野における先進的な研究上の知見を提供した。また、社会的にも、

大きな問題となっている介護職員の離職防止にも貢献可能な知見を提供しているといえる。これらのことは、申請者の関連領域に関する卓越した学識、研究遂行能力を有することを示すとともに、高度な専門的職務に従事する能力を有することを示すものである。

よって本論文は、博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令 和 3 年 1 月 8 日